☆年間第28主日（10月9日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（列王記下 5 章 14-17 節）

その日、シリアのナアマンは神の人、エリシャの言葉どおりに下って行って、ヨルダン川に七度身を浸した。 彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった。彼は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った。「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。 今この僕からの贈り物をお受け取りください。」神の人は、「わたしの仕えている主は生きておられる。 わたしは受け取らない」と辞退した。 ナアマンは彼に強いて受け取らせようとしたが、彼は断った。 ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。 僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物や その他のいけにえをささげることはしません。」

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅱ 2 章 8-13 節）

愛する者よ、イエス・キリストのことを思い起こしなさい。 わたしの宣べ伝える福音によれば、 この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたのです。 この福音のためにわたしは苦しみを受け、 ついに犯罪人のように鎖につながれています。 しかし、神の言葉はつながれていません。 だから、わたしは、選ばれた人々のために、 あらゆることを耐え忍んでいます。 彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。 次の言葉は真実です。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、
　　キリストと共に生きるようになる。
　耐え忍ぶなら、キリストと共に支配するようになる。
　キリストを否むなら、キリストもわたしたちを否まれる。

わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる。
キリストは御自身を否むことができないからである。」

福音朗読（ルカ 17 章 11-19 節）

イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、 遠くの方に立ち止まったまま、 声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。 イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。 彼らは、そこへ行く途中で清くされた。 その中の一人は、自分がいやされたのを知って、 大声で神を賛美しながら戻って来た。 そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。 この人はサマリア人だった。 そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。 この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

皆さまご機嫌いかがですか。寒くなったり熱くなったり、急激な寒暖差でびっくりしますね。これからは暑い日もありますが、冬に向かって少しずつ寒くなっていくことは当然ですので、冬の支度を始めましょう。
秋と言えば収穫の季節ですね。春から夏にかけていっぱい養分を蓄えて実が大きくなる季節です。教会のブドウや渋柿もたくさん実をつけました。ブドウもたくさん実をつけて大きくなったためか、ぶどう棚が傾いてしまいました。建付けが良くなかったこともあったのですが、実の重さで傾いてしまったようでした。今日のミサの朗読の主題は「感謝」のようですが、ミサそのものも「感謝の祭儀」と言われています。今日はその感謝について考えながらミサに参加してみましょう。

第一朗読　（列王記下 5 章 14-17 節）

第一朗読ではシリア人のナアマンという軍人が皮膚病を直してもらおうと、当時の預言者エリシャに会いに行ったエピソードが語られています。最初はエリシャの言葉に気分を害していたナアマンは付き添いの部下に諌められ、エリシャの言葉どおりにヨルダン川の水に七度身を浸して、子どものようなすべすべの体になったのです。その出来事に驚いたナアマンは引き返して、返礼として贈り物をエリシャに贈ろうとしますが、エリシャは受け取らなかったのです。ナアマンは食い下がりますが、エリシャは受け取りませんでした。エリシャにとって贈り物は何の意味も持たなかったのです。ナアマンは贈り物代わりに今、イスラエルのほかこの世界のどこにも神はおられないことがわかりました。今後は主以外の神々に焼き尽くす生贄を捧げることは致しません」と言って帰途に就いたのです。エリシャにとってこの言葉、回心こそが贈り物でした。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅱ　2 章 8-13 節）

パウロは自身に対する迫害について述べています。私たちのために死者の中から復活したキリストのために自分は鎖に繋がれていると。それは自分にとってイエス・キリストによる救いを得るためだと述べています。パウロにとってこの世の苦しみは確かにあるでしょうが、それを耐え忍ぶことによって私たちは、キリストと共に支配するようになると述べているのです。私たちは現実に様々な苦しみに遭いますがその苦しみはキリストと共にいる喜びに比べれば取るに足りないものなのです。

福音朗読（ルカ 17 章 11-19 節）

第一朗読と同じように、イエスによって癒された十人の人の話です。十人は祭司たちのところへ体を見せに行っている途中で癒されたことに気づきます。その喜びたるや今の私たちには理解できないくらい感動した

ことでしょう。感動のあまり九人はそのまま帰ってこなかったのです。しかし癒されたことに気づいた一人は祭司にその体を見せた後、引き返してきて、イエスに感謝を述べたのです。福音書はこの人はサマリア人だったと記しています。当時のイスラエル人の間では近くに住んでいながら外国人として軽蔑されていた存在でした。イエスは悲しい気持ちになり、「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか」。私たちも恩知らずにならないようにしましょう。私たちにとって大事なことはイエス・キリストの立ち帰ることなのです。

秋色の柿の葉　(2021 年秋)

P.S.

11 月最後の日曜日、すなわち待降節第一日曜日からミサの新しい式次第が始まります。ミサの式そのものはほとんど変わりませんが、司祭と信徒の皆さまの応答や、唱えられる祈りの言葉に変更があります。新しい式文のパンフレットがありますので、事前に確かめてください。

カトリック足立教会

主任司祭　野口重光